

懇談会の検討結果(とりまとめ)

東京一極集中の要因等①

東京一極集中の現状

- 東京圏の人口は全国の約3割を占め、他国の首都圏と比較しても比率が高く、近年も上昇が続いている。
(新型コロナウイルスの影響で直近は緩和傾向)
- 東京圏への転入超過数の大半を10～20歳代の若者が占め、男女別では女性が男性を上回っている。

考えられる東京一極集中の要因

(1) 修学・就職等のために20代前後の層が東京に流入

① 大学の東京への偏在

- 大学の定員や学生は東京圏に集中しており、卒業後そのまま東京圏で就職する割合が高い。(イギリスやドイツでは首都圏以外の地域にも学生が分散)

② 企業の本社等の東京への集中

- 上場企業の本社は東京都が全国の半分強を占め、増加傾向にある(近畿圏の本社が減少)。外資系企業、ベンチャー企業も東京都に集中している。

③ 賃金の高さ

- 東京圏は地方に比べて一般労働者、短時間労働者ともに名目の所定内給与の水準が高い。

(2) 魅力・利便性・自由度の高さ等を求めて東京に流入

① 東京の魅力等

- 修学や就職以外に、東京で暮らしたかった、地元や親元を離れたかったなどの理由で、東京に流入した人も多い。

② 特に女性に多い地方の不便さ・魅力のなさ・閉塞感

- 女性は男性に比べ、日常生活等の不便さ、娯楽施設等の少なさ、人間関係の閉塞感などを地元を離れた要因として挙げている。
- 特に東京圏に流入した女性は、地元の人々が「夫は外で働き、女性は家庭を守るべき」という意識を持っていると感じていた。

(3) 一度東京に来ると、地方に移住しにくい環境

① 終身雇用

- 日本は欧州諸国に比べて勤続年数が長く、定年まで1つの企業で働き続ける傾向がうかがえる。

② 職務や地域を限定した採用の少なさ

- 新規大卒採用において、職場や地域を限定した正社員の応募に対し、実際に就職につながったケースは少なく、学生の希望との間にギャップがある。

③ 子供の教育

- 子育てや子供の教育上の理由により、東京圏からの移住を検討できない世帯も少なくない。

東京一極集中のリスク

- 東京圏では首都直下地震等が切迫する中で、人や諸機能・施設が過度に集中しており、リスクの高い状況にある。



リスクへの認識の低さ

① 居住地選択におけるリスク認識の低さ

- それに対し、東京圏に在住している人においても、居住地の選択の際に地震災害や大規模水害のリスクを考慮している人は少ない。

② 企業のリスク対応の遅れ

- 東京都に本社を置く上場企業で見ると、BCPを未策定・未検討や災害時の代替・バックアップ拠点を未整備・未検討の企業も一定数あり、従業員数の少ない企業の方がその傾向にある。

東京一極集中の変化要因となりうる要素

今後さらに一極集中を促進しかねない要素

(1)人口減少による東京の過密度の低下

- 東京都の人口は将来的に減少が予測されており、東京流入のハードルが下がる可能性がある。

(2)東京圏における高齢者の増加が、ケアする若者世代をさらに呼び寄せる可能性

- 東京圏の高齢人口は全国と比べて大きく増加し、広範囲に分布する見込みであり、介護需要の急増により、さらに地方から若者が流入してくることが予想される。

(3)東京生まれ東京在住者の増加

- 東京圏在住者における東京圏出生者や両親とも東京圏出身者である人が増加している。
- 東京圏の大学生についても、約7割を東京圏の高校出身者が占めるまで増加している。

一極集中緩和の可能性のある要素

(1)テレワークの進展による「職場と仕事の分離」

- 新型コロナ対応と技術革新によるテレワークの進展が見られ、東京都の本社事業所の移転や縮小の検討、BCPの観点を含めた本社機能分散の動きにもつながっている。
- テレワークの利用度が高い企業を中心に、単身赴任の廃止やテレワークを前提とした居住地を問わない採用等の人事制度の検討が進んでいる。

(2)地方移住への関心の高まり

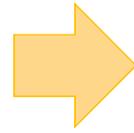
- 新型コロナ拡大前から地方への移住希望は高まっており、特に40代までの若い世代が多い。
- 新型コロナウイルス感染症の影響やテレワークの普及を受けて、20～30歳代の若い世代を中心に地方移住への関心が高まっている。

(3)「豊かさ＝賃金の高さ」からの意識転換

- 東京都の中間層の世帯は、可処分所得は比較的高いものの、それ以上に対して食・住関連の基礎支出が高く、他地域に比べて経済的に豊かであるとは言えない。
- 東京圏は他地域に比べて通勤時間が長く、フルタイム雇用の可処分時間(食事、睡眠、趣味等)が短い傾向にあり、居住スペース等のゆとりも少ない。

東京一極集中是正に向けた取組の方向性①

- ・大学(定員)の多い東京圏に学生が集中
- ・上場企業の本社の他、外資系、ベンチャー企業が東京に集中
- ・地方の低賃金



(1) 地方で修学・就職できる環境の整備

- ① 東京圏の大学の単位を地方でも取得できるような制度の導入
- ② 各地方大学における強みを生かした競争力の強化
- ③ 修学・就職等に伴う若者の東京への集中の是正
- ④ 産学連携等による地域の特色をいかしたイノベーションの創出
- ⑤ 地方の賃金を上げる取組
 - 〔・地方における生産性の高いベンチャー企業の創出
・農林水産業・観光業等の地方の基礎的産業の生産性向上 等〕

- ・魅力・利便性・自由度の高さ等を求めて東京に流入
- ・地元の閉塞感・男女の役割分担意識などへの不満(特に女性)

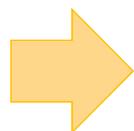


(2) 地方の生活環境の向上

- ① 生活の質を維持・向上していく取組
(デジタルメリットの享受を含む)
- ② 「選ばれる地方」となるための文化・自然環境等を含む魅力の向上・情報発信や関係人口拡大に向けた取組
- ③ 男女の役割分担やライフスタイルに対する固定的な価値観の払拭

東京一極集中是正に向けた取組の方向性②

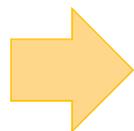
- ・終身雇用や子供の教育等により、一度東京に来ると、地方に移住しにくい環境
- ・東京圏における高齢者の増加が、ケアする若者をさらに呼び寄せる可能性



(3) ライフステージに応じて地方居住も選択可能となるような環境整備

- ① 地方で働きたい希望を実際の地方での就業につなげる取組
(地元からの就職情報の情報発信等を含む)
- ② 子育て世帯が地方で暮らせる環境整備
 - ・子育て期に地方居住が可能となるような勤務環境の実現
(東京一括採用の是正、テレワーク・柔軟な雇用慣行の実現 ほか)
 - ・東京圏と遜色ない教育を受けられる環境の実現
- ③ 高齢者への地方居住の選択肢の提供
 - ・高齢者が地方のコンパクトシティの中や交通の利便の良い縁辺部、自然豊かな地域等で豊かな時を過ごせる環境の実現
(地方の介護費用負担軽減等の制度面での対応を含む)

- ・首都直下地震等が切迫する中で諸機能・施設が東京に集中
- ・自然災害リスクへの認識の低さ

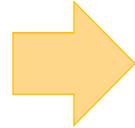


(4) リスク回避の観点からの取組

- ① 東京に諸機能が集積するリスクについての認識の共有
- ② BCPの策定やバックアップ機能の整備の促進
- ③ リスク回避のための東京都心の本社機能の分散等の促進

東京一極集中是正に向けた取組の方向性③

- テレワークの進展による「職場と仕事の分離」
- 地方移住への関心の高まり



(5)リモートで東京都心の仕事を地方や東京郊外で行う取組の推進

(※企業間のデジタル格差是正の取組も重要)

- ① 情報通信基盤の整備、セキュリティ機能の強化
- ② 行政・民間ともに業務のデジタル化の推進
(ペーパーレス化、Web会議の活用等)
- ③ 企業の人事制度の見直し
(柔軟な雇用形態、居住地を問わない採用等)
- ④ テレワークの受け皿となる地方や東京郊外の仕事・生活環境の充実
- ⑤ リアルで対面する際の移動の利便性向上
(交通ネットワークの整備、利用しやすい料金体系等)

- 中間層世帯の経済的な豊かさやフルタイム雇用者の平均的な可処分時間など、東京圏における暮らしの実態



(6)「真の豊かさ」の実現に向けた意識改革

- ・「真の豊かさ」の実現に向け、判断の材料となる様々な関連情報を提供

東京一極集中是正に向けた取組の検討における留意事項

- 東京一極集中の是正において、例えば、地方創生の観点からは東京圏から地方圏（東京圏外）への転出が求められるが、自然災害リスク回避や生活水準向上等のための都市の過密解消等の観点からは東京都心部から東京圏の郊外への転出でも一定の効果があるなど、施策の目的に応じて対象エリアを検討・明確化していく必要がある。
- 今回提示した方向性を踏まえて取組を具体化するにあたっては、取組の主体やターゲット、対象となる地域に応じて、講じるべき施策が異なってくることに留意すべきである。
- 東京一極集中の是正にあたっては、我が国の成長を牽引すべき東京の国際競争力の維持・向上とのバランスを図ることも重要である。
- 今後の社会経済状況等の変化と東京一極集中の関係等について、適時確認し施策に反映していくべき。

取組の対象となる地域

東京圏
(都心、郊外)

地方圏
(都市部、都市部外)

取組の主体やターゲット

行政
(国、自治体)

民間企業、経営者
(大企業、中小企業)

大学

個人
(地元に残ってる人、東京に出てきた人／東京生まれの人)
(学生／子育て世代／高齢者) など